

## 大学における全学同窓会組織の目的と機能

— 母校支援に関わる自覚的責務とその背景 —

大 川 一 毅 (\*岩手大学 評価室)

### はじめに

#### (1) 卒業生との接近を図る大学

少子化に起因する志願者・入学者の減少、運営費交付金や補助金額の伸び悩み、大学運営経費の増大など、日本の大学を取り巻く環境は依然厳しい状況にある。こうした中、卒業生（学士課程卒業生及び大学院課程修了者の双方を含む）との関係を強化する大学が増えている。卒業生は大学を構成するコミュニティーの重要な一員であり、大学にとって卒業生の存在は、その数的規模や国内外の社会における影響力、後輩・母校への支援意欲や愛着の強さにおいて、継続的な大学後援を幅広く期待できる心強き集団である。在学生にとって、卒業生は最も身近で具体的な将来のロールモデルであり、卒業生の協力によるキャリア形成教育、学修・研究支援、奨学援助に成果をあげている大学も多い。社会での卒業生の活躍は、学生時代に培った諸力の集積と成長のあかしと見なされ、卒業生が構築している人的ネットワークも含め、社会がその大学を評価する上での重要な指標となる。それゆえ、卒業生のための国家資格取得支援やキャリア形成支援、あるいは各種ネットワーク構築機会の提供など、継続的支援に努力する大学もある。卒業生との関係性が私立大学と比べて希薄といわれる国立大学でも、2004年の法人化以降、大半の大学が中期目標・中期計画に卒業生関連の事業計画を掲げている<sup>1)</sup>。今や、大学の発展的運営において、卒業生とリンクすることが重要な経営戦略になってきた。

#### (2) 卒業生をめぐる高等教育研究の現況

大学運営に卒業生が重要な役割を果たしている米国では、同窓会事業の事例研究や卒業生による母校支援のモデル化など、寄附金収入の増額を見据えながら、大学と卒業生との関係を扱う「Alumni Studies (校友行政研究)」が進んでいる。一方、日本の高等教育研究にあって、卒業生との関係強化を図る大学が増加しているにもかかわらず、大学と卒業生との関係をめぐる研究数は多くない。そうした中で、たとえば江原は、アメリカの大学における卒業生研究の歴史の変遷や到達点を整理・報告し、「Alumni Studies (校友行政研究)」の意味や必要性にも言及している<sup>2)</sup>。

1) 国立大学の卒業生事業については、例えば山下らが国立大学法人の中期目標・中期計画に関する調査分析を行い、そこで大半の大学が何らかの卒業生事業を企画実施していることを明らかにしている。(山下泰弘・大川一毅・西出順郎・篤田敏行, 2014, 「計画及び業務実績からみた卒業生事業の現状」, 『大学研究』第40号, 筑波大学大学研究センター)

2) 江原昭博, 2010, 「アメリカの大学における卒業生を対象とする研究: Alumni Studies の歴史の変遷」, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第1分冊55, 155-168頁。

鳥居は、大学ガバナンスの視座からアメリカにおける大学と同窓会との連携のあり方についてミシガン大学を題材とした事例研究を行い、日本の大学運営に幾多の示唆を与えている<sup>3)</sup>。わが国の事情を扱うものとして、国立大学における「全学同窓会」組織化の取り組みを中期目標・中期計画の記載から検証した高田による研究がある<sup>4)</sup>。この他、「卒業生サービス」をキーワードとし、その取り組みの現況把握に努めながら、大学運営における意義と可能性を見いだすことを目的とした実証的共同研究を大川らが行っている<sup>5)</sup>。その共同研究の一環として、山下らは、中期計画に掲載された卒業生事業について大学類型ごとに事業特性の分析を進め(前掲山下ほか, 2014)、西出らは、国立大学における卒業生サービス事業についてのモデル化を試みている<sup>6)</sup>。

### (3) 本研究に至る着眼点と課題設定

本稿筆者(大川)らは、大学と卒業生との相互支援関係構築に資するものとして「大学における卒業生サービス」に着目し、2011年より全国大学における実施状況調査研究に着手した。その一環として全国771大学を対象として「卒業生サービス実施状況アンケート調査(2013)」を行った<sup>7)</sup>。この結果、回答大学の97%が、卒業生との関係強化の必要性を認識し、何らかの卒業生事業を実施していたことが明らかとなった。卒業生事業の実施目的について、「大学と卒業生との関係維持」、「母校への関心の向上」の回答が80%を超えた。大学が持続的に発展していく上で、卒業生の存在は重要だという認識が強まっている<sup>8)</sup>。上記調査研究において、大学と卒業生との関係は、今や一方が支援し他方がその便益を享受するという関係から、両者が持続可能な範囲において相互に支援しあう双方向関係に移行しつつあることも指摘した。大学は、自らの存続・発展に向けて、卒業生に寄附や募金、教育・就職支援、教育成果の検証、大学運営への参画など、様々な協力を期待している。卒業生もそれぞれが構築した人的ネットワークを活かしながら、産学官連携の仲介、大学情報の拡散、子や孫・親族知人の進学誘導、生涯学習プログラムへの参加等も含め、大学の要請に応じている。しかし、大学は、卒業生に支援義務を強制することはできない。卒業生の母校支援は、あくまでも自発的意志によるものである。果たして大学は卒業生の自発的な「愛校心」を楽観的に期待し、「最も強力な後援者」と安易に位置づけていいのか。卒業生の誰しものが母校支援に意欲的とは限らない。そこで、次のような問題の設定に至った。すなわち、卒業生は、なぜ、母校である大学を後援するのか。卒業生達は母校の後援について、どのように考え、いかに振る舞い、何をもたらしてくれるのか。

---

3) 鳥居朋子, 2013, 「同窓会活動における大学への戦略的支援: ミシガン大学同窓会の事例に注目して」, 『大学論集』第44集, 広島大学高等教育研究開発センター, 131-146頁。

4) 高田英一, 2010, 「国立大学における全学単位での同窓会の現状について-全学同窓会の規約を中心に-」, 『大学評価研究』第10号, 大学基準協会, 79-87頁。

高田英一, 2012, 「国立大学の運営における同窓会の位置づけの現状について-中期計画の記述の分析を中心に-」, 『大学探究』, 第4号, 琉球大学, 1-10頁。

5) 大川一毅・西出順郎・山下泰弘, 2014, 「日本の大学における卒業生サービスの現況と課題」, 『大学論集』第47集, 広島大学高等教育研究開発センター, 187-200頁。

6) 西出順郎・畠田敏行・山下泰弘・大川一毅, 2014, 「卒業生事業の概念モデルに関する探索的考察 -地方国立大学モデルを想定して-」, 『大学探究』, 第5号, 琉球大学, 29-48頁。

7) 大川一毅・畠田敏行・山下泰弘・西出順郎, 2013, 「平成25年3月実施『全国大学における「卒業生サービス」実施状況調査』集計報告」科学研究費助成事業 基盤研究(C)(課題番号23531103)。本報告は岩手大学リポジトリで公開している。<http://ir.iwate-u.ac.jp/dspace/bitstream/10140/5015/1/kaken23531103.pdf>

8) 前掲大川一毅ら「日本の大学における卒業生サービスの現況と課題」(2014), 198頁。

か。その「見返り」として卒業生は何を求めるのか。大学や卒業生組織は、それをどう理解すべきか。こうした卒業生の視点に立った母校支援に関する研究（校友行政研究）は、わが国の高等教育研究の現況において、大学による卒業生アンケート調査も含め、これまで見いだすことが出来ない。母校支援を視点とした卒業生研究は、大学の事業計画策定に示唆を与えてくれる。大学の成果検証という観点からすれば、大学評価に関わるIR（Institute Research）分析のテーマともなりうる。

#### （４）本稿の研究対象と検証方法

卒業生の大学支援動機や意志について、これを卒業生個々から確認し、その全体像を明確にすることは至難である。そこで、大学における卒業生組織である「全学同窓会」<sup>9)</sup>に着眼した。大学には様々な卒業生集団が組織され、成員構成も多様である。しかし、「全学同窓会」は、基本的に大学の卒業生・修了生のすべてに参加資格を与え、大学を代表する最大規模の卒業生組織・集団である。母校に対し、卒業生の総意を示す組織とも言える。こうしたことから、卒業生の大学支援意志やその具体的内容を把握する上で、卒業生個々の意志を代表・代替させる役割を託することは可能と考える。ならば、その意志をどこに見いだすか。これにあたっては、「全学同窓会」の定款・会則・規約などの規程（以下、会則と記する）に着目する。「全学同窓会」のホームページには「会則」を掲載している場合が多く、そこにはそれぞれ組織の「目的（意志）」や「事業（行動）」に関わる規程を確認することができる。また、「全学同窓会」ホームページでは、組織と会員を代表する会長の「挨拶」が掲載されることが多く、会則に示された目的や事業実施の背景にある母校への思いや現状認識、大学支援に向けた自覚的責務を伝えている。

こうして本報告は「全学同窓会」に着目し、これら卒業生を代表する組織が、大学への支援や後援についていかなる責務を自覚しているのかについて、会則からそれぞれの組織目的や体制等の規程を検証することとする。これにあたり、まずは日本の大学における「全学同窓会」の設置状況の現況報告から始めたい。そもそもこれまでわが国の大学全体における「全学同窓会」の設置状況を調査して公表したものはなく、この調査結果自体が「校友研究」や「高等教育研究」上の有益な資料となる。「全学同窓会」の設置状況に関する現況調査にあたっては、2015年時点における国公私立の全775大学を対象として、webサイトでの「全学同窓会」ホームページ開設状況や大学公式ホームページ掲載の卒業生向け情報、webサイト上の検索機能、あるいは必要に応じて各大学の沿革史を活用しながら、「全学同窓会」の設置有無を把握し、これをデータベース化した。さらに、各「全学同窓会」ホームページで組織の定款・会則等が公開されている場合は、全ての規程を悉皆調査的にして「全学同窓会」の「名称」「目的」「事業」「会員」「会費」等をテキスト資料としてデータベースに入力した。データベースは2014年から構築を開始し、2016年に最新情報へ更新した。こうして蓄積した「全学同窓会」会則における「目的」規程について、本稿では頻出語彙（キーワード）を抽出するテキスト分析を行い、その語彙を数値データとして可視化し、卒業生組織である「全学同窓会」の目指すところを明らかにする。あわせて頻出語彙を使用している会則の具体的記載事例を確認していく。さらに「全学同窓会」会則の「事業」、「会員」についても同様の方法で分析を進める。これら検

---

9) 大学における卒業生組織は、同窓会の名称を使用するが多いが、他にも校友会、学友会、全学同窓会連合など、呼称は多様である。本稿では、これらを認識しながら、全卒業生・修了生を参加対象として組織する全学的な卒業生組織を総称して「全学同窓会」と表記する。

証にあわせ、「全学同窓会」ホームページや同窓会会報等に掲載されている「会長挨拶」の言葉や、これまで筆者らが実施してきた「全学同窓会」担当者への訪問調査インタビュー記録も参考にして、「全学同窓会」の大学支援に関わる自覚的意志とその背景についての理解を深めたい。

なお、本研究はJSPS科研費 JP15K04340「大学の持続的発展に資する校友（大学・学生・卒業生）事業の意義と可能性に関する研究（研究期間2015-2017）」の助成を受けている。また、筆者らによるJSPS科研費 JP23531103「地方大学における『卒業生サービス』の意義と可能性に関する実証的研究（研究期間2011-2013）」の研究結果も反映している。

## 1 大学における「全学同窓会」の現況

### (1) 卒業生組織の多様性

大学における同窓会などの「卒業生組織」は多様である。たとえば、前身校・系列校も含む全学・全学園の卒業生を主な構成員とする「全学同窓会」がある。大学の「全学同窓会」は、学部や卒業年度の如何を問わず、すべての卒業生が会員となる資格をもった構成者範囲の最も広い組織であり、多くの場合、在学生や教職員も準会員として包摂する。保護者や中途退学者の参加を可能とする組織もある。この他にも同窓会として一般的なのは、出身学部や学科を基礎単位として組織する「学部・学科同窓会」、あるいは出身学部や学科の枠を越えて卒業年次や入学年次を単位として組織する「年次同窓会（同期会）」、出身地や現在の居住地を単位として組織とする「地域同窓会」、学生時代に所属したクラブやサークルなど課外活動の参加者や同じ研究室・ゼミのメンバーなど在学中の所属組織を基礎にして世代を超えた結びつきで組織する「OB・OG会」、さらには同じ職場（勤務先）や同業種（職種）で組織される「職場・職域同窓会」もなじみがある。海外の赴任・駐在地や居住地を単位とした海外支部同窓会や、元留学生の母国における同窓会（留学生同窓会）も数多い。昨今では、同窓会の中での女性部の結成も珍しくない。卒業生は、これら構成員要素が異なる多層多様な組織に複数参加する資格を持つ。各種同窓会の規模や歴史、資産、大学との関係性も様々である。大学が公認して組織の運営を支援する場合もあれば、大学とは別個の組織や法人としている場合もある。

### (2) 「全学同窓会」の設置動向

私立大学の多くでは「全学同窓会」の設置は特段珍しいことではない。しかし、国立大学の同窓会活動は各学部を単位とした「学部同窓会」が中心である場合が多く、「全学同窓会」の無い国立大学も珍しくなかった。学部単位の同窓会組織は、会員規模や資産状況、事業内容も一様ではなく、卒業生の同窓会活動に対する意識や活動意欲にも温度差があった。このことの一つの要因として、国立大学発足にあたっての歴史的経緯がある。国立大学の大半は、第二次大戦後の1949年に、同一県内に設置されていた旧制官立高等教育機関等を統合することにより新制大学として発足した<sup>10)</sup>。大学発足にあたり、旧制学校の各同窓会は、「大学同窓会」として「統合」はせず、組織の「伝統継承」を選択した。それゆえに国立大学「学部同窓会」の沿革は、「大学（新制）」の歴史よりもよりの古いことが多い。さらに、新制国立大学の立地は旧制学校の所在地を継続利用したことにより、学部ごとに分散立地することが多く、学生の大学

10) 統合した旧制高等教育機関として、大学、高等学校、専門学校、高等師範学校、師範学校、青年師範学校、などがある。また、県内の公立高等教育機関を併合した場合もある。

との関わりや交友関係は、学部組織が中心となった。それゆえ同窓会組織も「学部」中心でそのまま機能させる方が実際のだった。前身校を基礎とした学部同窓会の会員特性や規模、資産も一様では無かったことは、一体的な「大学（全学）同窓会」組織化の阻害要因となった。新制国立大学としての歴史を重ねた後も、卒業生をはじめ学部構成員の所属意識は、大学そのものよりも前身校を基盤とする学部が強く、「全学同窓会」設置の声が全学的に盛り上がることは希だった<sup>11)</sup>。しかし、18歳人口の減少や、国立大学の法人化など、大学を取り巻く環境は大きく変わり、進学者市場も年ごとに縮小していった。いかに大学の経営を安定させ、教育力を強化するか。限られた資源をどう使い、新たな資源をどこに見いだすか。こうした課題に直面する中で、卒業生や全学同窓会の存在が着目されるようになった。法人化して以降、国立大学では学部ごとの同窓会を「連合」して全学体制化する仕組みの構築が進んだ。

国立大学における「全学同窓会」の設置年を示したのが表1である。新制大学発足の1949年から1979年まで、国立大学における「全学同窓会」の設置動向はことさら目立つものではなかった。しかし、1980年以降になると設置が急速に増加し、国立大学が法人化した2004年を含む2004～2009年の時期だけで27組織が設置された（2000～2009年では31組織）。なお、1948年以前の戦前期から設置されていた「全学同窓会」は、現在も単科系大学や女子大学として継続する国立大学の同窓会であり、旧制時代に官立単科大学や専門学校、あるいは女子高等師範学校同窓会として設立されている。

表1 国立大学における「全学同窓会」の設置時期と設置数

| 設置年  | 1948<br>以前 | 1949～<br>1959 | 1960～<br>1969 | 1970～<br>1979 | 1980～<br>1989 | 1990～<br>1999 | 2000～<br>2003 | 2004～<br>2009 | 2010～<br>2016 |
|--|------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 設置数  | 10         | 3             | 3             | 3             | 7             | 8             | 4             | 27            | 6             |
| ※本表は、国立大学「全学同窓会」の定款・会則、ホームページ、沿革史書籍等をもとに作成。<br>国立全86大学にあって2016年現在で「全学同窓会」の設置を確認できた71大学の状況。<br>※1949年に新制国立大学が発足した。2004年に国立大学は法人化した。 |            |               |               |               |               |               |               |               |               |

国立大学における「全学同窓会」組織化の背景について、各学長や同窓会長の言葉を同窓会ホームページで見いだすことが出来る。たとえば、岡山大学では「全学同窓会」化推進の背景について、同窓会長が次のように説明している。

「大学を取り巻く環境は大きく変貌し、極めて厳しくなってきました。その中において岡山大学が大学間競争に勝ち抜き旧帝大系に劣らぬ地位を保っていくためには大学とAlumniが一体となって諸課題に挑戦し、成果に結び付けていくことが必要不可欠です」。

これを受けて、同じサイトの「学長挨拶」でも、同窓会をめぐる従来の状況を「私が学長に就任した際、最初感じたことは、「全学同窓会」組織の活動が非常に弱いということでありました。学部同窓会個々の活動は活発なのですが、総合大学である岡山大学の強みが、「全学同窓会」の活動にはほとんど活かされていないということでした」と描写し、今後の卒業生に期待するものとして「私は岡山大学の学長であると同時に、岡山大学の卒業生でもあります。卒業生には、「岡山大学の何々学部を卒業した」という意識はあると思いますが、「岡山大学を

11) 国立大学における「学部同窓会」重視の状況や、その背景については、2011年から2013年にかけて実施した国立大学同窓会担当者への訪問調査で、それぞれ確認した。訪問大学は、訪問順に大阪大学、神戸大学、和歌山大学、岡山大学、香川大学、九州工業大学。

卒業した」という共通の絆を持っていただきたいと思っています。学生諸君や卒業生の皆さまには、岡山大学で学んだという岡山大学のアイデンティティーに誇りを持っていただき、岡山大学との強い絆をとおして、大学とともに会員の皆さまも発展していただきたいと考えております」と述べている<sup>12)</sup>。こうして従来の同窓会組織を再編し、新たに「岡山大学Alumni（全学同窓会）」を2013年に発足させた。その特質をホームページの巻頭ページで「これまでの全学同窓会とは異なり、岡山大学の知的営みに関わる全ての方々を構成員とする人的ネットワーク組織であります」と宣言し、大きく掲載している。

北海道大学では、2004年に設置した「全学同窓会」組織をさらに強化し、すべての北大関係者で構成する全学的組織として2016年に「北海道大学校友会エルム」を創設した。これについて名誉会長である北海道大学総長は同会設立の背景と趣意について「組織の充実に伴う所属の細分化が、大学への帰属意識の希薄化に繋がっているという声も聞こえています。これまで、連合同窓会を含む学部同窓会の大学に果たしてきた役割は大変大きなものがあります。それは本学の歴史にしっかりと刻み込まれているものであり、在学生にとってどれほど大きな価値であったかは言うまでもありません。これに加え、この度校友会エルムが設立され、本学に関係する全ての方々に参加いただけることは、同窓生の連携、親睦、互助、知徳の啓発や、大学への支援強化、国際的な相互理解の促進という視点のみならず、北海道大学への統一的な帰属意識の醸成に繋がるものであり、大きな大学力を形成していくものであると信じています」と語り、「これからの本学の成長を支え、正に礎となる「北海道大学人」という意識が醸成されることで、未来へと続く「知の継続」に皆様が共に参加して頂けるものと考えるところです。是非とも、北海道大学に関係する全ての皆様が校友会エルムに参加され、大学が自らに何をしてくれるのかを待つのではなく、自らが大学から何を得ようとするのか、その中で大学との接点を見いだし、多くの英知に触れ、大志を抱き、自己研鑽に繋げていただけましたら幸いです<sup>13)</sup>」と期待する。

表2 公立大学における「全学同窓会」の設置時期と設置数

| 設置年 | 1948<br>以前 | 1949～<br>1959 | 1960～<br>1969 | 1970～<br>1979 | 1980～<br>1989 | 1990～<br>1999 | 2000～<br>2003 | 2004～<br>2009 | 2010～<br>2016 |
|-----|------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 設置数 | 4          | 5             | 1             | 4             | 3             | 11            | 7             | 20            | 8             |

表3 私立大学における「全学同窓会」の設置時期と設置数

| 設置年 | 1948<br>以前 | 1949～<br>1959 | 1960～<br>1969 | 1970～<br>1979 | 1980～<br>1989 | 1990～<br>1999 | 2000～<br>2003 | 2004～<br>2009 | 2010～<br>2016 |
|-----|------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 設置数 | 77         | 47            | 52            | 45            | 31            | 43            | 25            | 37            | 27            |

※表2、表3ともに、公立大学及び私立大学における「全学同窓会」の定款・会則、ホームページ、沿革史等をもとに作成。

※公立全86大学にあって2016年現在で「全学同窓会」の設置を確認した63大学の状況。

同様に私立全603大学にあって「全学同窓会」の設置を確認した384大学の状況。

12) 岡山大学Alumni（全学同窓会）ホームページ「ご挨拶／会長・学長」より引用（2016年9月掲載確認）  
<http://www.cc.okayama-u.ac.jp/~dousou/alumni/01.html>

13) 北海道大学校友会エルム・ホームページ「ごあいさつ／北海道大学校友会設立に際して」より引用（2016年9月掲載確認）  
<http://www.alumni-hokudai.jp/about/index.html>

表2は公立大学と私立大学について「全学同窓会」の設置年状況をまとめたものである。公立大学は2004年以降の「公立大学法人化」の進展とあいまって、国立大学同様に「全学同窓会」の組織化が進む。2016年現在では全公立86大学の80%（69大学）で「全学同窓会」の設置を確認することが出来る。一方、私立大学における「全学同窓会」の設置は、ここ最近だけが顕著だったわけではない。多くの私立大学では、大学設立後、最初の卒業生が巣立った直後もしくは数年以内に、卒業生主体で「全学同窓会」の設置に動く。それゆえに「全学同窓会」の設置は、大学新設の動向に併行している。旧制大学、あるいは旧制高等教育機関を前身校に持つ伝統校の大半は、第二次大戦以前に設置された「全学同窓会」を継承している。

## 2 会則等に見る「全学同窓会」組織の目的と機能

### (1) 「全学同窓会」組織の目的

これら「全学同窓会」組織は、いかなる目的をもって設立されているのか。各組織の定款や会則等の「目的」規程から確認したい。

表4 「全学同窓会」の定款・会則・規約等の「目的」規程に使用される頻出語彙

| 頻出語彙  | 全体  | 国立大学同窓会 | 公立大学同窓会 | 私立大学同窓会 |
|-------|-----|---------|---------|---------|
| 発展    | 89% | 85%     | 91%     | 89%     |
| 親睦    | 87% | 82%     | 90%     | 88%     |
| 会員相互  | 79% | 61%     | 83%     | 83%     |
| 寄与    | 73% | 73%     | 76%     | 73%     |
| 母校    | 54% | 17%     | 57%     | 61%     |
| 社会    | 25% | 32%     | 34%     | 22%     |
| 貢献    | 20% | 28%     | 28%     | 17%     |
| 交流    | 14% | 45%     | 14%     | 8%      |
| 教育    | 13% | 38%     | 2%      | 10%     |
| 連携    | 13% | 30%     | 16%     | 9%      |
| 文化    | 12% | 18%     | 19%     | 10%     |
| 建学・精神 | 11% | 1%      | 3%      | 15%     |
| 支援    | 7%  | 18%     | 12%     | 4%      |
| 研究    | 6%  | 13%     | 3%      | 5%      |
| 学部    | 4%  | 17%     | 3%      | 2%      |

本表は定款や会則等を公開している「全学同窓会」(全478大学、うち国立71、公立58、私立349)にあって、会則の「目的」規程で使用頻度の高い語彙を抽出したものである。提示する数値は、上記「全学同窓会」数を母数とし、各語彙を規程条文に使用している組織数の比率を示している。(2016年9月現在)

表4は、大学における「全学同窓会」の定款・会則・規約における「目的」の規程文に使用される頻出語彙（キーワード）の一覧表である。頻出語彙として「発展」、「親睦」、「会員相互」、「寄与」、「母校」などの語彙が多く見出せる。これらから「全学同窓会」の目指す方向性も見えてくる。会則等では「全学同窓会」等の「目的」について、「大学の発展」及び「会員相互の親睦への寄与」を規定するのが標準的である。また、社会への貢献や母校の支援に言及

する組織も多い。実際の「目的」規程を例示しよう。

「岩手大学同窓会連合会会則（目的）第2条 本会は、第4条に定める会員相互の親睦を深め、会員の総意に基づく事業等を実施することで岩手大学の発展に寄与するとともに、地域社会に貢献することを目的とする。」

「滋賀県立大学同窓会湖風会会則（目的）第2条 本会は、会員相互の親睦を図り、母校の発展に寄与し、あわせて社会に貢献することを目的とする。」

「一般社団法人共立女子大学・共立女子短期大学櫻友会定款（目的）第3条 この法人は、会員相互の親睦を図り、共立女子大学・共立女子短期大学の発展に寄与し、あわせて社会に貢献することを目的とする。」

会員相互の交流・親睦と大学発展へ寄与の関係性について、九州工業大学明専会の会長はこう語る。「校友会の役割は大学支援に大きく軸足を移す必要があります。しかしそのための基盤として、交流・親睦の輪を拡げることが活動の底流になれば会の意味はありません。老・壮・青が参画し、絆を深めるネットワークの構築も必要になりましょう<sup>14)</sup>

また、法政大学校友会ホームページの会長挨拶では、「卒業生と大学はいつの時代も運命共同体」と位置づけ、「卒業生の活躍は大学を活気づけ、大学の躍進は卒業生を勇気づける関係にある」と考え、「こうした関係性の中で、校友会は世代、性別、出身地などの違いを超え、母校の名のもとに集い、ネットワークを形成し、卒業生相互の活躍を促進し、その様々な結果や影響によって母校発展に資する」ことを述べている<sup>15)</sup>。千葉商科大学同窓会のホームページでは、前同窓会長が、同窓会の組織作りとその前提について「同窓会組織は人の集合体であるという前提に立ち、その上で堅固にしてかつ合理的な仕組みづくりを図るべきであり、親睦が図られてこそ組織が維持できることを確認したい」と会員相互の親睦の重要性を述べていた<sup>16)</sup>。

「目的」規程では、この他にも「学生の奨学、学生の課外活動支援、学生のキャリア支援、保護者との連携支援」を強調する組織もある<sup>17)</sup>。

会則の「目的」規程における前掲語彙（キーワード）の出現比率（表4）を、全大学「全学同窓会」と国立大学「全学同窓会」で比較したのが図1である。この対比で着目したいのが「母校」という語彙である。国立大学「全学同窓会」での使用比率は、全体比率より37ポイントも低い。詳細を言えば、全大学「全学同窓会」の「目的」規程のうち、「母校」という語彙を使うのは半数以上の54%、私立大学の「全学同窓会」会則中ではさらに高まって61%に上る。しかし国立大学「全学同窓会」の会則等では14%に過ぎない。国立大学の場合、法人化以降、同窓会の全学化が進んでいることは先述したが、それはあくまでも各学部同窓会の存在が前提であり、それら組織を連携・調整する「連合体」が国立大学「全学同窓会」だった。そうした特性が、「目的」規程における「母校」という語彙の少なさや、「交流」「連携」「学部」という語彙の出現率の高さにも現れている。また、「建学」「精神」という語彙が国立「目的」規程で極度に少ないのも、旧制前身校の特性を濃厚に存続させたまま新制大学として足踏せざるを得なかった国立大学の沿革事情も反映しているよう。

14) 一般社団法人明専会ホームページ「会長 新年のあいさつ（平成23年1月）」（2016年9月現在掲載終了確認）

15) 一般社団法人法政大学校友会ホームページ「会長挨拶」より引用（2016年9月現在掲載確認）。  
<http://www.hoseinet.jp/about/greeting.html>

16) 千葉商科大学同窓会ホームページ「会長挨拶」より引用（2016年9月現在掲載終了確認。現在のサイトは新会長の挨拶に更新された）。

17) たとえば、小樽商科大学「全学同窓会」（公益社団法人 緑丘会）の定款では、目的の第一義に在学生のキャリア支援を掲げている。<http://www.ryokyu-web.net/about/teikan.html>



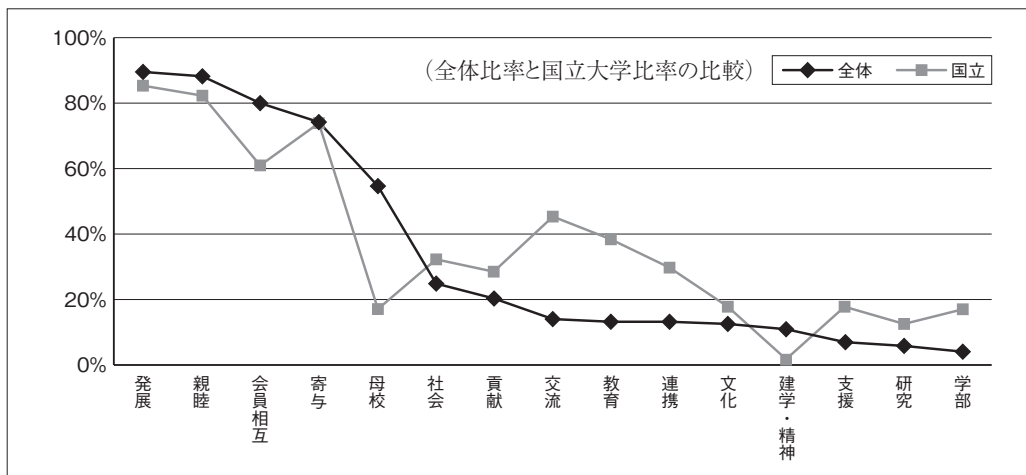


図1 会則等の「目的」規程における頻出語彙

国立大学の事情は、「社会」「貢献」「交流」「教育」「連携」「文化」「支援」「研究」「学部」などの語彙が、「全学同窓会」会則中の「目的」規程における出現比率が高いことにもうかがえる。具体的規程を確認すると、たとえば以下の様である。

「富山大学同窓会連合会会則（目的）第2条 本会は、富山大学の学部別同窓会及び同窓会支部間の交流、連携を推進することにより、富山大学（旧富山大学、旧富山医科薬科大学、旧高岡短期大学を含む）の卒業生（修了生を含む。以下同じ。）の交流、親睦を図り、併せて富山大学の発展に寄与し、社会に貢献することを目的とする。」

「宮崎大学同窓会連合会会則（目的）第2条 本会は、宮崎大学における学部別同窓会（医学部にあつては、学科別同窓会を含む。以下「学部別同窓会」という。）の連合組織として、相互の交流及び連携の推進を行い、宮崎大学の基本理念の達成に協力し、その発展に寄与することを目的とする。」

「岐阜大学同窓会連合会会則（目的）第2条 本会は、岐阜大学（以下「大学」という。）の各学部等同窓会（以下「学部同窓会」という。）の連合組織として、大学との連携及び学部同窓会相互の交流を図ることにより、大学及び学部同窓会の発展に貢献することを目的とする。」

「熊本大学同窓会連合会会則（目的）第2条 本会は、熊本大学の学部等同窓会及び地域別同窓会間の全国的交流、連携を推進することにより、同大学の卒業生の交流、親睦を図り、併せて同大学との連絡を緊密にし、もって、今後の同大学の発展に協力することを目的とする。」

これら会則の「目的」規程に依るならば、国立大学の「全学同窓会」が目指すところは、学部等同窓会あるいはその他多様な同窓会間の「連合組織」として各同窓会の交流を促進し、その総体的な力を導き、これによって大学の発展に寄与することにある。これについては、2004年の法人化時にあわせて「全学同窓会」の連絡協議会を結成した新潟大学の同会会長挨拶にも説明されている。すなわち「世界に通用する大学へブランド力を高めるようバックアップして

18)「新潟大学全学同窓会連絡協議会広報」1号、2004年6月1日

ゆくことが、「全学同窓会」の最大の目的です。八万余の同窓会会員同士が親睦を深めるとともに、最強のサポーターとして大学を応援していくことが必要です<sup>18)</sup>。他にも、各学部同窓会を「全学同窓会」の構成会員としている信州大学同窓会連合会では、同会ホームページの「連合会代表挨拶（2016年現在掲載終了）」で連合会の目指す方向性を述べていた。すなわち、「各学部の同窓会の力を結集し、連合会の活動が少しでも支えになればと考えています。同窓生の活躍と交流・連携が各学部の同窓会の発展に、更にその力を結集して大学が発展する原動力になり活力のある新しい同窓生を育て、回り回って自分たちの誇りとなり、こんなに素晴らしい大学の卒業生であったことの嬉しさと喜びに繋がるのではないかと思います。これらの手助けをするのが連合会の役目の一つではないかと考えております」

国立大学の卒業生組織では、「大学の教育や研究、地域の文化や社会への貢献に寄与」することを会則の「目的」規程に織り込む頻度も全体に比べて高い。この背景について、国立大学の卒業生事業関係者（担当理事、担当部課長、担当教員、等）への訪問調査インタビューにおいて、興味深いコメントを得た。すなわち、「国税に依存して大学運営を行う国立大学にとって、卒業生を対象としたサービス事業の実施や卒業生の利益を主目的とした同窓会事業には、様々な困難や制約があるし、学内外からの抵抗もある。そこで、学生支援、外部資金獲得、大学の国際化推進、あるいは社会貢献活動の一環、等の領域で卒業生と関わる中期計画を立案し、また、法人化以降、新たに組織しようとする全学的卒業生組織の会則にこれを明記し、これら制度的な後押しで卒業生事業を進めている<sup>19)</sup>。こうしたことも含め、国立大学「全学同窓会」は、「目的」規程に大学・学生支援や地域貢献の側面も強く打ち出している。

## (2) 「全学同窓会」組織の事業

次に「全学同窓会」の会則・定款等に規定されている「事業」を確認しよう。前述した「目的」規程での検証と同様に、全775大学を対象として、そのうち「全学同窓会」の会則等から「事業」規程の記載を確認出来た459組織から事業内容を項目として抽出した。その結果を一覧にしたのが表5である。これらを検証すると、「事業」内容として「会報・会誌の発行」、「会員名簿の発行」、「会員相互の親睦・懇親・交流事業」などが、およそ半数以上の「全学同窓会」会則規程で記載している。例をあげてみよう。

「首都大学東京同窓会規約（事業）第4条 本会は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。 1. 大学の発展への協力及び相互の連携 2. 会報、会員名簿及び各種資料の発行 3. 会員相互の研究発表、研修及び講演会の開催等 4. 新年会の開催等会員相互の親睦を図るための事業 5. その他、前条の目的を達成するために必要な事業」

「一般社団法人 獨協大学同窓会 定款（事業）第4条 当法人は、第2条の目的を達成するため、次の事業を行う。(1)会員名簿の作成維持及び管理に関する事業 (2)会報の発行、その他の出版物の発行に関する事業 (3)会員の親睦及び福祉に関する事業 (4)母校獨協大学を後援するための事業 (5)その他、第2条の目的を達成するために必要な事業」

以上見るように、具体的事業として、大学や会員の現況や「全学同窓会」が実施した諸活動を報告する「会報・会誌の発行」をまずは重要事業と位置づける。会員名簿の発行も重要事業とする組織も多い。ただし、個人情報保護法との関わりから、会員名簿の編集・発行は、昨

---

19) 前掲大川一毅ほか「平成25年3月実施『全国大学における「卒業生サービス」実施状況調査』集計報告」、15頁。

今、多くの困難をとめない、このことが卒業生組織の事業内容に関する課題となっている<sup>20)</sup>。

「会員相互の親睦・懇親・交流事業」は、「全学同窓会」の目的規定に直接対応する事業である。実施されている事業として、たとえば同窓会総会の開催、大学の周年事業や行事・ホームカミングデー等の共催、業種交流会の開催、年次同期会の開催、講演会・研修会の開催、など多様である。国立大学でも、2004年から始まった第一期中期目標・中期計画に「卒業生との連携」あるいは「大学や卒業生間でのネットワーク形成」を掲げた大学も多い<sup>21)</sup>。親睦・懇親・交流事業は、学部や卒業年度の壁を取り払い、全学的な人的ネットワーク形成契機となることも意図しているようである。

この他、会則等の「事業」規程では、「大学・母校への支援・後援事業」、「各種同窓会や支部の支援」、「講演会・研究会の開催」、「大学や同窓会間との連携・連絡・調整」、「寄付・財政援助事業」、「教育・研究活動の支援」などを実施すべき事業としてあげている。

表5 「全学同窓会」組織の会則等に規定された「事業」内容

|                   | 全体  | 国立  | 公立  | 私立  |
|-------------------|-----|-----|-----|-----|
| 会報・会誌の発行          | 64% | 38% | 64% | 69% |
| 名簿の発行             | 56% | 28% | 65% | 61% |
| 会員相互の親睦・懇親・交流事業   | 49% | 38% | 47% | 52% |
| 大学・母校への支援・後援事業    | 39% | 58% | 33% | 36% |
| 各種同窓会や支部の支援       | 33% | 51% | 13% | 32% |
| 講演会・研究会の開催        | 31% | 36% | 25% | 31% |
| 大学や同窓会間との連携・連絡・調整 | 26% | 52% | 25% | 21% |
| 寄付・財政援助事業         | 22% | 14% | 13% | 24% |
| 教育・研究活動の支援        | 20% | 43% | 15% | 16% |

※本表は、国立大学、公立大学、私立大学の「全学同窓会」組織等のホームページ、定款や会則、沿革史での記載等より作成した。  
 ※2016年現在の全国775全大学のうち、「全学同窓会」組織等の定款・会則等を確認ができ、そのうちさらに「事業」に関する規程を確認出来た459組織（国立69、公立55、私立335）に関する数値である。  
 ※提示数値は、確認規程のうち、該当事項が記載されていた比率である。

会則等で規定された同窓会組織の「事業」の内容（表5）について、「全学同窓会」全体と国立大学に限定して記載比率を対比したのが図2である。名簿の発行事業は、国立大学「全学同窓会」において大学全体での比率をかなり下回っている。国立大学の「全学同窓会」設立は

20) 前掲「卒業生サービスの実施状況調査」において、「卒業生サービス実施上の課題」を調査したところ、「会員名簿の発行」に関する回答が多く寄せられた。その自由記述欄では「会員名簿の発行が強く求められながらも、個人情報保護法との兼ね合いから、卒業生情報の把握や、会員名簿の発行には苦慮している」と記載された。またいくつかの国立大学「全学同窓会」からは、大学・学部同窓会・全学同窓会など、それぞれの間での卒業生情報の受け渡し、共有については、個人情報保護や情報資産の観点から難しい課題を抱えていることが回答された。

21) 山下らは、国立大学法人の中期目標・中期計画を資料にして、そこに使用される頻出語彙を指標として国立大学における卒業生事業を分析している。検証の結果として、国立大学法人中期計画の多くにおいて「卒業生との連携」「同窓会との連携」に関わるキーワードを使用し、各法人が卒業生や卒業生組織とのネットワーク形成を重要視していることを明らかにしている。（前掲山下ほか「計画及び業務実績からみた卒業生事業の現状」、35頁～48頁）

2004年の法人化以降が多く、会員名簿の発行については、2003年5月に公布されて2005年4月に全面施行された個人情報保護法への配慮が必要で、慎重とならざるを得なかった。

国立大学「全学同窓会」が規定する「事業」として、その比率が、全体比率よりも高いのは「大学・母校への支援・後援事業」、「各種同窓会や支部の支援」、「講演会・研究会の開催」、「大学や同窓会間との連携・連絡・調整」、「教育・研究活動の支援」である。国立大学「全学同窓会」は、学部同窓会の「連合体組織」も多く、その特性が実施事業にも反映している。こうしたことから「各種同窓会や支部の支援」や「教育・研究活動の支援」を事業とする比率も高くなっている。「全学同窓会」の事業として、この他にも、卒業生のネットワークづくりを兼ねた講演会や研究・研究会の開催も行われ、また、卒業生（同窓）会館の設置や運営、学生の留学やキャリア形成支援を重視する事例もある。

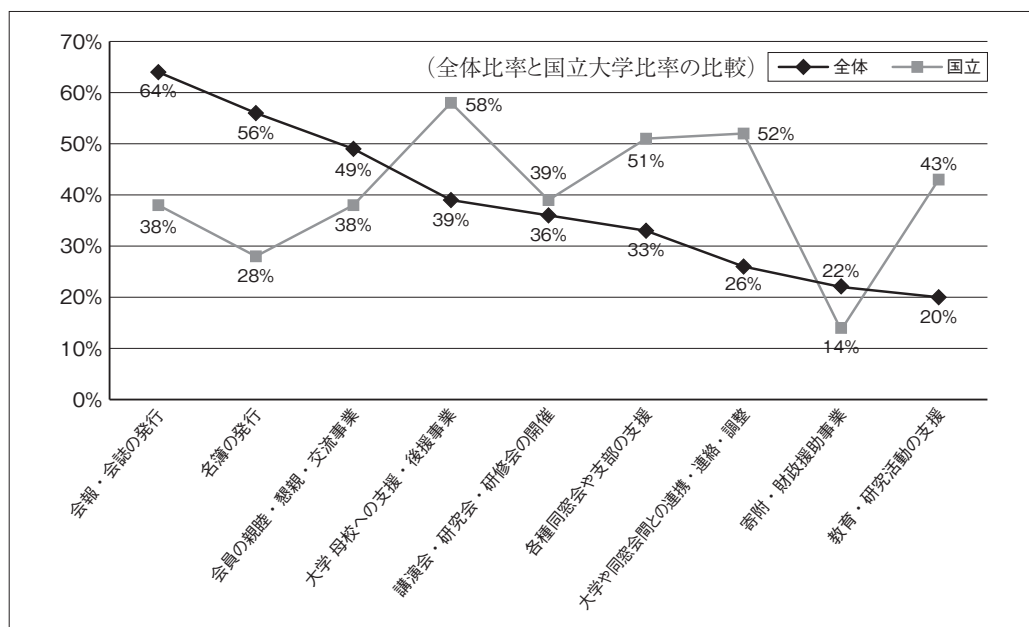


図2 同窓会組織「会則」等に規定された「事業」内容

### (3) 「全学同窓会」組織の会員規程

#### ① 会員の基本構成

「全学同窓会」の会則等では、会員資格も規定する。これらでは「①前身校も含む該当大学や学園の卒業生・大学院修了生等、②大学の在学者、③大学の役員・教職員」と定めるのが通常である。卒業者全員を会員とする組織もあれば、「全学同窓会」への入会意思を示し会費を納入した者に限る場合もある。在大学生を「準会員」とする組織も多く、学生もすでに「全学同窓会」の構成員に位置づけている。教職員の扱いについては多様である。現旧すべての教職員を正会員とする場合もあれば、在職中のみ正会員もしくは準会員とする場合もある。学生と同様に準会員とする場合や自学卒業生でない教職員は会員とは認めない事例もある。なお、大学に貢献のあった者については、会長等が認めた場合、会員もしくは名誉会員とする組織も多い。

標準的な会員規程の事例はたとえば、以下の様である。

「東京農工大学同窓会 会則（会員）第5条 本会の会員は、次の5種とする。

一、正会員 本学及びその前身の出身者 二、特別会員 本学の現職教職員で理事会で推薦した者 三、準会員 本学学生及び他大学を卒業し、本学大学院生となった者 四、賛助会員 本学に在籍する学生の父母等で、本会の趣旨に賛同し、賛助会費を納入した者 五、名誉会員 本会及び母校の発展に寄与した者で、理事会で推薦し、総会で承認した者」

## ② 国立大学「連合同窓会」の会員構成

国立大学の「全学同窓会」は、会員構成においても学部同窓会の存在を前提とする場合が少なくない。会則等で「会員」規程を確認出来た国立68大学「全学同窓会」のうち19組織が学部同窓会そのものを会員（組織会員）として定める。たとえば秋田大学全学同窓会の規程は以下の様である。

「(組織) 第5条 本会は、次に掲げる各学部等同窓会をもって組織する。

一 教育文化学部同窓会 二 医学部医学科同窓会 三 医療技術短期大学部・医学部保健学科同窓会 四 工学資源学部同窓会」

ただし、大学としてより全学一体化した卒業生組織を構築するために、会員構成を組織単位から個人単位にあらためた組織もある。そうした措置をとった組織として、たとえば前掲した「岡山大学Alumni (「全学同窓会」)」では、その同窓会設立趣意書にその背景を説明する。すなわち、「現在、岡山大学には9つの学部等に同窓会があり、それぞれ独自の活動をしているが、各同窓会の学部等の垣根を越えた、横断的かつ有機的な結びつきや、岡山大学との連携は必ずしも十分であるとはいえない。」と、これまでの同窓会連合であった岡山大学同窓会が十分機能していなかった事実を明確にし、これをふまえ「岡山大学を、地域はもちろん、わが国の教育研究を担う中核的な大学として発展させていくためには、私たち同窓生が一丸となって支援していくことが必要である。ここに、岡山大学同窓会を設立しすべての同窓が相集い、学部・学科の枠を越えて相互交流をはかり、心をつなげて岡山大学の目標達成に参画していくことを決意するものである<sup>22)</sup>」として2013年に「岡山大学Alumni (全学同窓会)」の新たな発足を述べている。会員構成も、従来の「全学同窓会」が「学部単位」だったのを改め、卒業生、修了生、学生など、個人単位の会員資格とした。

## ③ 多様化する会員資格

卒業生が「同窓会」に参加することの魅力の一つは、卒業年次は異なりながらも同じ学校空間で体験した各種共通経験の同調であり、学校生活に伴う価値観や行動規範の継承による一体感の喜びだろう。同時にそれは、時にきわめて排他的な閉鎖性をもって成り立つ。特に伝統校や社会的威信の高い学校ではこうした気風が醸成されがちで、それを学閥と非難されることもある。このような排他性や選民集団意識を嫌悪し、同窓会活動の参加を拒絶する卒業生も少なくない。しかし、現在、大学の運営をめぐる厳しい状況にあって、組織の門戸をより広げようとする事例も現れている。たとえば、北海道大学では、2004年に設立した「全学同窓会」に代えて、2016年に新たな考え方で「北海道大学校友会エルム」を立ち上げた。その特徴として「1. 旧連合同窓会に未加入であった同窓生の方々がともに参加できるシステムとなったこと。2. 同窓生に加え、大学の教職員、在学生・院生、さらには保護者等を含めたすべての北海道大学関係者が加入できること。」としている。同会ホームページでは「世界トップレベルの教

22) 岡山大学Alumni (全学同窓会) 設立趣意書 (2012年10月) (2016年9月掲載確認)

<http://www.cc.okayama-u.ac.jp/~dousou/kyudousou/img/H24/h24-siryu5.pdf>

育と研究活動を実現していくためには、大学と北大関係者との緊密な連携が欠かせません。そこで、すべての関係者で構成する全学的な組織として「北海道大学校友会エルム」が新たに設立されました」と設立を宣言する。設立の経緯について「これまで学部や地域単位に分かれていた各同窓会のより一層の発展をめざし、2004年4月に、北海道大学連合同窓会が発足されました。このたび、大学とその関係者の連携をさらに強化し、真のスーパーグローバル大学として自他ともに認める、世界トップレベルの大学を実現・支援するため、2016年6月1日に、北海道大学校友会エルム（以下「エルム会」）という新しい組織が誕生しました。エルム会では、これまでの学部同窓会や国内外の地区同窓会の垣根を越えた横断的な連携関係を構築するとともに、卒業生に加え、大学の教職員、在学生・院生、さらには保護者等を含めたすべての関係者で構成する、新たな全学的かつ国際的な組織として、会員間のコミュニケーション連携と大学への支援体制を強化します」と説明している<sup>23)</sup>。

この他にも、大学卒業生のみ限定せず、大学の後援に賛同する関係者を巻き込んで、組織の大学支援機能を強化する大学が増えている。東北大学萩友会も、会員について以下の様に規定する。「東北大学萩友会会則（会員）第5条 本会は、次に掲げる者をもって会員とする。東北大学の学部卒業生・研究科修了生等、東北大学の在校生、東北大学の役員、教職員、東北大学の役員、教職員であった者のうち本会に入会を希望する者、東北大学の在校生の保護者のうち本会に入会を希望する者、東北大学の諸活動に理解があり、貢献・協力のあった者で、会長が認めた者、その他、東北大学に関係のある者で、会長が認めた者」

大学同窓会にあって、卒業生の一体化を強く促進しながら、もう一方で、従来の考え方に縛られない「後援賛同者集団」としての構築を意図するこうした新たな動きが始まっている。

#### ④ 「校友」の新しい考え方

大学の卒業生組織（同窓会）の名称は多様である。2015年現在で全国775大学のうち、今回、「全学同窓会」の存在を確認できたのは638大学である。そのうちの459組織（71.9%）は、「同窓会」を名称としている。この他、大学や学園に縁のある地名や漢語、花木名、あるいは創設者や建学の精神に因んだ名称も多い。あるいはこれら卒業生組織にあって一定数を占めるのが「校友会」の名称である。「校友会」の命名は、第二次大戦前の旧制期に設立起源をもつ大学が、当時まだ学校法制上「専門学校」であった頃に「全学同窓会」を設立した場合などに多かった<sup>24)</sup>。そもそも「校友」とは、「同じ学校に学ぶ友」の意味であり「同窓の友」と定義される。学校側から言うならば「その学校の卒業生」である。しかし「校友」の定義については、「校友会」のある大学の学則を確認しても明文化された規定はなく、その解釈は曖昧である。しかし、昨今、大学が卒業生との関係強化を図る動向の中で、「校友」という存在に積極的な意味を持たせて位置づけようとする事例も出てきた。たとえば以下の会則規程がある。

「文教大学学園校友会会則 第5条（校友） 本会は、次の者を「校友」と称する。

- (1)文教大学学園の在校生とその保護者 (2)文教大学学園（旧立正学園を含む。）の卒業生とその保護者 (3)文教大学学園（旧立正学園を含む。）の教職員（退職者を含む。） (4)文教大学学

23)「北海道大学校友会エルム」webサイト『設立までの経緯』

<http://www.alumni-hokudai.jp/about/story.html> (2016年9月現在掲載確認)

24)「校友会」は、1890（明治23）年に旧制第一高等学校で文武諸技芸の奨励を趣旨とする生徒団体として組織され、それが中等学校においても生徒団体の名称としても広がっていった。一方、卒業生組織の名称としても、1890年頃以降から旧制専門学校において採用されていく。

園（旧立正学園を含む。）の理事・監事・評議員（退職者を含む。）」

「校友」について、その考え方を明確に示す組織もある。例えば明治学院大学校友会ホームページにおける「校友会設立について（要旨）」の記載では、『校友の範疇を全明治学院大学とする』と題して「卒業生、各種同窓団体、各種OB会、在校生・在校生クラブ、現旧教職員等の個人および団体すべてを校友として捉え、大学が積極的な施策を講じます<sup>25)</sup>」と説明する。また、専修大学校友会会長は、ホームページにおける「会長挨拶」にて「校友は、大学が生み出す誇り高さ知的財産です」と語っている<sup>26)</sup>。

すべての卒業生を、そのまま「校友」と呼ぶ場合もあれば、大学発展に向けた後援意志を寄せる学外者、保護者も含めて「校友」と位置づける場合も出てきた。中退者も、定める基準を満たせば校友に準ずる資格を提供する組織も少なくない。「全学同窓会」の活動に積極的ではない卒業生が増加していることにそれぞれの組織は苦慮している。こうした背景もあって、会員の門戸を広げる動きや、後援意思の強固な会員を特化しようとする動きに着目しておきたい。

### 3 「全学同窓会」の機能と母校支援に向けた自覚的責務

#### (1) 卒業生組織の役割に関する3段階

「全学同窓会」には、その歴史の蓄積や、輩出した人材の数に応じながら、組織機能の発展段階があるという<sup>27)</sup>。まず、仲間うちの単純な「親睦組織」としてスタートする。同窓会活動の多くはここから始まる。やがて会員数が増加し、組織体制の整備も進み、資産がある程度蓄積されて行くと、第二段階のステップとして「会員の福利厚生に関する互助会的機能」を果たし、また「共存共栄の間柄である母校への支援組織」へと成長していく。これら機能を存続維持しながら、最終的には多様な人材集団、あるいは特定領域の専門職集団として「社会への利益還元」を意識するようになる。これらの段階素描はあくまで一般論ではあろうが、今日の日本の大学における「全学同窓会」の多くが、「親睦組織」の段階を経て、次の段階である「母校への支援組織」へと進んでいるか、あるいはそのための機能強化を図っていることは会則規程等に見てきたところである。各組織のホームページ掲載の「会長挨拶」からもこうした機能への移行に向けた組織の「自覚的責務」をみる事が出来る。いくつか確認してみよう。

「千葉商科大学同窓会・会長挨拶：今日大学を取り巻く環境は年々厳しさを増す状況です。とりわけ学生募集に関する大学間競争はしのぎを削る状況に置かれています。こうしたことから、各大学は更なる教育の質の向上と、教育内容の刷新を以て時代のニーズに応える形での改革をとおして高等学校や受験生、そして保護者などに対する訴求を図っている状況だと思えます。こうした状況に鑑み、同窓会が母校の良きパートナーとして、また、後ろ盾となる役割は年々高まって来ており、直接・間接の要請事項と申せます。したがって、私たち同窓会はこう

25) 明治学院大学校友会ホームページ「校友会設立について（要旨）」

[https://koyukai.meijigakuin.ac.jp/about\\_koyukai/koyukai\\_towa/st\\_about\\_alumni\\_sub01](https://koyukai.meijigakuin.ac.jp/about_koyukai/koyukai_towa/st_about_alumni_sub01)（2016年9月現在掲載確認）

26) 専修大学校友会ホームページ「第12代 校友会会長挨拶」（2016年9月現在掲載終了確認）

27) 同窓会の発展3段階に関しては「一般社団法人藤田学園同窓会」ホームページに掲載されていた「会長挨拶（第3代会長・近松均氏）」を参考にさせていただいた。（2016年9月現在掲載終了確認）

した負託に微力ながらも応える得る力量を備え、応分の役割を果たしていくことは大切なことです」(千葉商科大学同窓会ホームページ掲載。2016年9月現在掲載終了確認)

「芝浦工業大学同窓会・会長挨拶：本学の卒業生は堅実に仕事ができる，仕事に強い技術者として社会から高い評価を受けています。近年益々受験生が増加しています。今年も33000人を越えて3年連続で3万人を超えています。この少子化の時代，理工系離れと言われる中では大躍進中と言えると思います。これも先輩諸兄を始め我々世代，そして後輩達の努力の積み重ねによるものだと自負しています。それが大学の歴史と伝統だと思います。「我々芝浦人」は一体感を持って今後共一層，芝浦工大のブランド力の向上を目指し，全国の卒業生が交流の輪を広げ先輩，後輩の絆をより強くすることにより，これから社会に出る在校生の為の応援団として校友会も活動していきたいと思います」(芝浦工業大学ホームページ掲載) <http://www.shibaura-koyu.jp/gaiyo/aisatu.html> (2016年9月現在掲載確認)

## (2) 「つながりのサポート」

本稿のこれまでににおいて、「全学同窓会」の目的ならびに事業にあって，会員相互の親睦・交流を重要項目としていることを確認してきた。「全学同窓会」は，この「親睦・交流」の役割を，卒業生会員相互にだけではなく「大学と卒業生」，「大学と学部」，「大学と社会」，「業種と業種」など，様々なつながりや連携のサポートという取り組みの中にも見いだしている。たとえば名古屋大学同窓会では，「つながり」の観点から設立の趣旨について以下の言及を行う<sup>28)</sup>。

「大学が社会へ向けて情報発信および研究教育活動への参加や支援を求めるためには，大学構成員の努力だけでなく同窓生などの支援協力が不可欠であり，同窓会組織は重要な役割を果たす。従来は，部局同窓会が同窓生間の情報交換や親睦などの役割を果たしてきた。しかし，その活動はそれぞれの部局に限定され全学的な広がりを持つことは少なかった。今後，大学の研究教育および同窓生などの社会的な活動を広く情報共有し，大学と同窓生などとのつながりを強める新しい形の同窓会活動が必要とされている。社会に開かれた大学として名古屋大学が発展していくためには，大学と同窓会の緊密な連携が必要とされており，大学と同窓会は連携して社会に一層の情報公開を行い，社会から種々のニーズを汲み上げる必要がある。また，同窓生にとって，専門分野を越えての情報交流は従来にもまして重要であり，名古屋大学に「全学同窓会」組織を設立することが必要である」

三重大学同窓会会長は，大学の発展に向けて，同窓会組織や卒業生の連携の必要性についてこう語る<sup>29)</sup>。「法人化により，地域圏大学としての役割はますます重要になってきております。三重大学がそのような使命を果たすためには，学部を越えた同窓生との不断のコミュニケーションを維持することが求められます。なぜならば，複雑化した現実社会に発生する諸問題の解決や新たな知見の創出には，大学内外における三重大学関係者間の専門分野を超えた協力や交流が必須であるからです。「全学同窓会」はそのような協力や交流の実現を促進するためにも必要なものであります。三重大学が国内外における有数の大学として発展できるよう，「全学同窓会」は三重大学を積極的に支援したいと思います」

電気通信大学の同窓会である「目黒会」名誉会長は，大学と社会のコミュニケーションの必

28) 名古屋大学同窓会ホームページ「設立理念」

<http://www.nual.nagoya-u.ac.jp/about/idea.html> (2016年9月掲載確認)

29) 三重大学同窓会ホームページ「三重大学同窓会の皆様(平成21年3月会長挨拶)」

<http://www.mie-u.ac.jp/doso/greeting.html> (2016年9月掲載確認)



要性とそこに関わる同窓会の責務についてこう語る<sup>30)</sup>。

「大学の最も重要な使命である人材育成の成果は、卒業生、修了生が社会にどのように貢献しているかによって評価されます。電気通信大学の存在が社会で高く評価されてきたのは、卒業生、修了生の活躍によるところが大であることは論を待ちません。大学が社会で有為な人材を輩出するためには、社会とのコミュニケーション、社会との連携が極めて重要です。電気通信大学にとって、最も身近で、最も効果的な社会との接点が目黒会です。目黒会は電通大で学んだ人たちの会ですから、電通大のことを、後輩たちのことをいつも気にかけてくれています。電通大にとっても、現在ここで学ぶ人たちにとっても、目黒会は頼りになる存在です。いつでも親身になって相談できる家族のような関係です。電気通信大学は、2018年に創立100年を迎えます。創立100周年をどのように祝うことができるか、まさにこれからの10年は電気通信大学の正念場です。社会から信頼され、電通大を多くの人が訪れ、電通大で学ぶことに憧れる若者が殺到する、そんな大学になりたいと思います。そのためにも、目黒会との連携、協力、さらには、目黒会を通しての広く社会とのコミュニケーションが不可欠なのです」

さらに、社会と大学との「つながりのサポート」として、入学者確保や就職支援に関わる協力を大学発展に向けた責務として自覚し、これに取り組んでいる組織もある。たとえば、平安女学院大学校友会は、校友会の目的と役割についてこう語る。「校友会は、会員相互の親睦とともに、母校の末永い発展のために、学院関係者が学生・生徒を温かく見守り支援することを目標として設立されました。中でも、学院発展の基盤は、安定した入学者の確保と希望や適性に見合った就職先の保証であり、これを支えるのが校友会の役割です<sup>31)</sup>」。また、工学院大学校友会の会長挨拶では「工学院大学は、卒業生の血縁関係者に対する推薦制度とOB教員の推薦による入試制度を発足させました。これらを成功させるためには、我々校友のバックアップも必要で、母校を積極的にアピールしていかなければなりません。校友の一人ひとりが自分の周りの家族や同窓生に働きかけ、新しい工学院大学を知ってもらい、少しでも多くの人たちに受験していただき、仲間を増やしていきたいものです」と意気込みを述べる<sup>32)</sup>。

「全学同窓会」は、卒業生集団という自らの組織を核として、卒業生、大学、学部、社会、地域、など、大学と関わる様々なセグメントを結びつけている。そのつながりが価値を生み、大学や会員に利益をもたらす。従来、同窓会など卒業生組織の多くが、そうした機能を無自覚的に行ってきた。それを今日、自らの組織の重要な存在意義として自覚し、責務として遂行しようとしている。

### (3) 建学の精神の継承

「全学同窓会」の目的規程にあって、「建学」や「精神」の語彙が頻出していることは前述した。私学の「全学同窓会」では、母校の建学の精神を実社会で具現化し、これを次世代に継承することを自覚的責務としているところもある。大学は、卒業生の行動や価値観の形成に、もはや直接的に関与出来ない。建学の精神や愛校心の継承は、卒業生組織に託されたミッション

30) 目黒会ホームページ「名誉会長挨拶」

[http://www.megurokai.jp/home/modules/11\\_aboutus/index.php?content\\_id=4](http://www.megurokai.jp/home/modules/11_aboutus/index.php?content_id=4) (2016年9月掲載確認)

31) 平安女学院大学校友会ホームページ「校友会の目的」

[http://www.megurokai.jp/home/modules/11\\_aboutus/](http://www.megurokai.jp/home/modules/11_aboutus/) (2016年9月掲載確認)

32) 工学院大学校友会ホームページ「会長挨拶『多くの校友がイベントに参加を』工学院大学校友会 会長 長嶋秀世」(2016年9月掲載終了確認)

といえるかもしれない。「建学の精神」の継承に関する「全学同窓会」の自覚的責務は、各組織ホームページやそこでの「会長挨拶」に見いだすことができる。いくつか引用してみよう。

「建学の精神に賛同し結集した同窓生の母校への帰属意識は、他大学には無い強さがあります。同窓会活動を通じ、その気持ちを建学の精神と共に次なる世代へ継承し、絆をより強いものにしたと考えます」(一般社団法人 獨協大学同窓会「会長あいさつ」)

<http://www.dokkyo.com/about/guide.html> (2016年9月現在掲載確認)

「麗大麗澤会の役割は何か?と人問わば、それは『建学の精神(麗澤スピリット)』の涵養に努め、それが社会に発揚されるためのカタライザー(触媒)的な存在になることだ!』と答えることも可能かと考えます。会員諸兄におかれては、同期会、地域麗澤会、海外麗澤会、クラブ・ゼミOB会、学友会等での活動を通じて、麗澤スピリットを発揮し、社会における共通善の推進に努め、麗澤ブランドの更なる高揚に励んでいただきたいと思います。そのような活動に対して麗大麗澤会もささやかながら積極的な支援を惜しまぬ所存です」(麗澤大学麗澤会「会長あいさつ」) <http://reidai.reitakukai.jp/about/message.html> (2016年9月現在掲載確認)

「かつてのように、社会福祉系大学が少ない時代ならいざ知らず、今や四年制福祉系大学は約150校もあり、相対的に母校社大の地位と役割は低下して来ています。そのような中、改めて社大の建学の精神(「窮理窮行」「忘我友愛」「平和共生」)を踏まえ、校歌に謳われた“社会の福祉誰が任ぞ”の思いの具現化として、全国社会福祉教育の、社会福祉実践の中核としての役割を母校及び卒業生が担うことは容易なことではありません。しかしながら、それをやり遂げることが母校の使命であり、卒業生の役割であると考えています。同窓会はこのミッションを大切にしなければならないと思います」(日本社会事業大学同窓会「会長挨拶-第七代会長に就任して-」) [http://jcsw-alumni.com/?page\\_id=18](http://jcsw-alumni.com/?page_id=18) (2016年9月現在掲載確認)

大学の量的拡大にともない、各大学の個性が希薄になっているといわれる。大学は、国公立を問わず、自らの理念(ミッション)を再確認し、自学の存在意義を明確にした教学運営を求められている。しかし、それは容易なことではない。こうした中で、母校の精神を、むしろ大学よりも強固に継承する「全学同窓会」は、大学にとってかけがいのない存在である。

#### (4) 後輩・母校支援のための機会の提供

同窓会ホームページにおける会長挨拶などでもしばしば語られているように、母校に無関心な卒業生が増加している現状は「全学同窓会」の懸念となっている。少子化による「大学全入時代」といわれる昨今において、「入れる大学」に入学したゆえの「不本意入学」も、やがて卒業後の同窓会活動に消極的な姿勢をとることにつながっている。しかし、こうした一方で、「全学同窓会」の存在意義は、卒業生に母校支援の機会を提供することだと考える組織もある。2013年に大川らが実施した、前掲『全国大学における「卒業生サービス」実施状況調査』でも、卒業生が大学に求めている「卒業生サービス」として高い回答比率を示していたのが「学生との交流機会の提供」、「母校支援の契機提供」であった。なかでも母校への愛着を持つ卒業生が多い大学では、卒業生が愛校心を発揮できる機会を提供することそのものが、そのまま「卒業生サービス」となっていた。これについて、実施した訪問調査でのインタビューでは次の説明があった<sup>33)</sup>。

33) 訪問調査は、脚注7で前掲した研究の一環として、2011年から2016年にかけて実施し、同窓会担当理事・部課長にインタビューを行った。訪問した国立大学は前掲脚注11に記載した6大学、私立大学については名城大学、金城学院大学、追手門学院大学、同志社大学、早稲田大学、立命館大学、明治大学(訪問順)である。

「卒業生の母校への支援動機は愛校心です。学生や後輩の役に立ちたい。大学を支えるのが卒業生としての責任、と自覚する方も多い。それゆえ、キャリア支援や同窓会活動など、卒業生の皆さんに愛校心を発揮させる場を提供することが卒業生サービスとなっているのです（私立大学）」

「本学は母校を愛するOBが多い大学である。卒業生は母校愛のカタマリ。大学に命助けられた、みたいに思う方々が多い。だから卒業生は母校に恩返しがしたくてたまらない。大学はその機会を提供することを重要視している（国立工業系大学）」

こうした事実があることもふまえ、「全学同窓会」では母校支援の契機提供やそのための仲介を自らの役割と自認し、これをPRしている大学もある。たとえば一橋大学の「全学同窓会」である如水会は、その「会員」になることの特典について、ホームページでこう説明する。「【会員特典サービス】会員は、会員であり続けることによって、母校一橋大学を支援しており、これが最大の特典です。その他、以下の便益供与を受けることができます<sup>34)</sup>」として、会報の無料配付、如水会館や一橋クラブ・レストランの割引、行事・講演会への参加や会員証カード（クレジットカード）の発行の利用等を「その他」と括って列挙する。

関西学院同窓会のホームページに掲載されている「会長挨拶」では、卒業生それぞれの活躍と、卒業生の同窓会参加そのものが、母校の支援につながることを強調する。引用しよう。「我々同窓生にとって母校の発展と活躍は何時も勇気づけられ、励みになるものです。同窓会としてこれに向け全面的に協力していく所存です。そのためには、まず国内外で活躍する同窓生がいま置かれている立場や活動をしている分野で、スクールモットーの理念を実践し、社会に貢献することで「関学人ここにあり」と示さなければならないと考えています。また、それと同時に母校の現状やその動向に関心を持ち、さらに母校で学び得たことに感謝の気持ちを忘れず、母校支援の輪を広げるため、自らすすんで同窓会活動に参加して頂きたいと考えます。同窓会も年代・性別を越えた多くの同窓の参加を促すことが大切だと思っています。幸い同窓会の各地域支部や公認団体の努力によって、若年層や女性の参加が増加しており大変喜ばしい傾向だと感じているところです。今後も魅力ある活動を継続して行い、同窓会にご家族連れでも気軽に参加でき、関西学院に関わる多くの人達、いわゆる「関学ファミリー」が和やかに集う場でありたいと願っています<sup>35)</sup>」

「全学同窓会」の母校支援は、寄附金を提供するだけではない。卒業生による母校支援は、寄附金の募集に応じるだけではない。そうした考え方が広がりつつある。卒業生にとって、愛校心を発揮する場は思いの外に少ない。

### むすびにかえて（「共助」としての同窓会活動）

「大学は、価値交換（Value Exchange）の場」という考えがある<sup>36)</sup>。大学は一方的に学生に授業を教えて学位を与えているだけではなく、学生側からは、授業料をはじめ、大学への帰属意識、活気・活力といった価値が大学に提供される。社会に対して大学は教育した人材を輩出し、また開発した先端的知識や技術、継承・蓄積した文化的価値を踏まえた知見を提供する。

34) 如水会公式ホームページ「如水会について（会員特典サービス）」

<https://www.josuikai.net/home/introduction/service>（2016年9月現在掲載確認）

35) 関西学院大学同窓会ホームページ「2015年1月会長挨拶」（2016年9月現在掲載終了確認）

36) 船戸高樹・徳井有監修、日本私立大学協会編、1998、『米国大学の経営戦略』、学法文化センター出版部、70頁。

これに対して社会は大学に研究資金や雇用の場、あるいは大学への評価という対価を提供する。教員相互にしても、学生同士にしても、様々な興味関心や経歴、相違する認識や価値観が交流することでそれぞれの価値が交換され、新たな価値も生まれる。大学のあらゆる場所、機会において「価値の交換」というメカニズムが存在する。このことは、大学と卒業生組織、卒業生組織における会員同士、あるいは卒業生と学生といった関係においても言えることだろう。「全学同窓会」は、こうした大学における「価値交換の仲介」、言い換えるならば「繋がりや結びつきのサポート」の役割に自らの存在意義を見だし始めていることを本稿は示してきた。しかし、卒業生や「全学同窓会」が母校の支援を自覚的責務とするのは、大学のためだけではなく卒業生自らのためでもある。卒業生や「全学同窓会」による母校発展の寄与に向けた活動は、大学と卒業生それぞれの相互利益のための「共助活動」ともいえよう。大学と卒業生・同窓会組織の共助的相互関係に言及する「全学同窓会」のホームページがいくつもある。たとえば、

「大学は、校友が社会の各分野で活躍することを期待し、校友は、母校が発展することを期待しているという関係は、いつの時代でも変わらない普遍の関係です。校友が母校を卒業したということ、これは一生の縁、孫代々まで変わらない縁です。校友は大学と共に、そして、大学は校友と共にあります<sup>37)</sup>」(明治大学校友会ホームページ「会長挨拶」)

「校友の活躍が母校の評価につながります。それがまた校友にとっての誇りとなって帰ってくるものでもあります。いわば学園と校友は、それぞれの立場を尊重しつつ、相互に連携を深め、相乗的に発展していく共同体です<sup>38)</sup>」(立命館大学ホームページ「校友会会長挨拶」)

1956年に、早稲田大学の濱信泉総長は、大学と卒業生との関係についてこう述べている。

「母校は社会の舞台に活躍する校友にとっては、大きな背景であり、スポット・ライトである。母校の名声が高まることによって、校友の姿も引き立つ。逆に社会の各面における校友の地位が高まり、その力が増大することによって、母校の声価も高まり、いよいよ反映するのである<sup>39)</sup>」。

大学への社会からの評価や名声は、卒業生個々やその集団の活躍によってもたらされる。同時に、大学が獲得した高い社会的評価や名声は、卒業生個々にも還元される。それゆえに大学は卒業生を支援する。そして、卒業生や同窓会組織も大学を支援する。それら相互支援的な共助行為が大学の社会的認知の向上につながる。本研究でこれまで行ってきた全国大学への訪問調査では「同窓会活動なども含めて、卒業生事業は大学と卒業生との利益が一致することで進展する」という趣意を複数大学で得た。大学の発展は、卒業生とともにあることを忘れてはならない。卒業生や同窓会から支援された大学は「共助の責務」の自覚が必要である。

卒業生や同窓会など卒業生組織による母校後援の実績は、それまで大学が提供した諸価値に対する満足感を表明するものであり、大学にとってまごうことなき成果指標である。そうした意味で、大学と卒業生との関わりや状況や、「全学同窓会」の機能状況も、社会が大学を評価する上での重要指標となっている。卒業生がなにゆえに大学(母校)への愛着を持ち(あるいは持たず)、いかなることにおいて母校との関わりを望む(あるいは拒絶する)のか。「校友行政」をめぐる大学間競争はすでに始まっている。

37) 明治大学校友会ホームページ「会長挨拶」[http://meiji-shikon.net/?page\\_id=46](http://meiji-shikon.net/?page_id=46) (2016年9月現在掲載確認)

38) 立命館校友会ホームページ「校友会会長挨拶」<http://alumni.ritsumei.jp/about/greeting/> (2016年9月現在掲載確認)

39) 早稲田大学校友会編、2010、『早稲田大学校友会125年小史』、早稲田大学出版部、84頁